

○大分県では、オリジナル品種「ベリーツ」を育成し、作付を推進しているが、産地ごとに栽培方法が異なり、ベリーツの魅力である年内～3月末の早期収量の確保に課題があった。

○そこで、技術的な課題の解決を図るため、**①普及指導員とJA営農指導員の合同プロジェクトチームの設置による指導体制の強化(月1回)**②モニタリングデータの活用による単収向上を図る環境制御研修会(年9回)を行い、各産地においてベリーツモデル経営体の育成に取り組んだ。

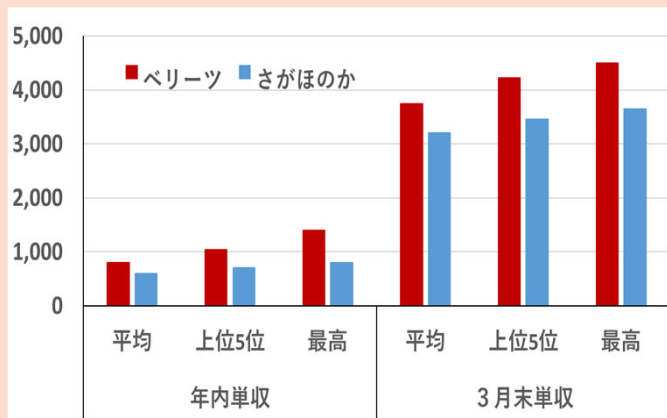
○さらに、JAグループと連携し、ベリーツの特性を活かした新たな出荷規格を創出し、単価向上を図ったことで生産者の生産意欲が高まった。

○その結果、各産地の**モデル経営体を中心に早期収量が確保できた**。
 今後はモデル経営体を起点として産地全体に高単収技術を波及させる。

具体的な成果

1. モデル経営体の早期単収(3月末)確保

■R3ベリーツモデル実証ほ 3月末単収
 平均 3.7t/10a、最高で4.5t/10a
 各産地で早期単収を確保するモデルが誕生



■指導員の指導力向上と連携強化
 月1回生産力向上研修会を開催し、高単収者の圃場研修や各産地の技術の共有により、指導力の強化ができた

■新たな出荷規格による単価向上
 規格外の大玉乱形果を「ベリーツドルチェ」として販売し、生産者の所得向上に貢献。



ベリーツドルチェ

普及指導員の活動

■令和3年～

○普及指導員とJA指導員による合同研修会(月1回)

○モデル実証ほの設置および重点指導モデル経営体への重点指導と月2回の生育調査による技術改善。
 産地の技術確立への波及

■環境制御研修会の開催

モニタリングデータの活用による収量向上を図るため、環境制御研修会を年9回継続して開催した。また、併せてモバイルワーク機器を活用したオンライン配信も行い、研修内容の周知に努めた。

この研修を通じて、植物の能力を引き出す生理生態に対応した栽培技術の理解が進み、品種特性に応じた栽培管理の改善点が整理された。

普及指導員だからできたこと

・各地のいちご担当普及指導員がチーム活動により、県下の生育状況や技術的な課題に対して、速やかな対応を行うことにより早期に普及課題の解決が図れた。

・行政、研究機関との課題共有および連携により、県下全域で共通課題を捉えた活動が展開できた。

大分県

大分県オリジナルいちご品種「ベリーツ」の単収向上

活動期間：平成2年度～令和3年度（継続中）

1. 取組の背景

近年、全国的にいちごの生産量や栽培面積が減少していく中、消費者の嗜好が多様化し、各県で特徴のあるオリジナル品種が育成され、作付けが進んでいる。

このような中、本県では、早生多収で果実糖度が高く、果皮色の良い「ベリーツ」を育成し、県内作付面積の8割を占める「さがほのか」からの転換を進めるべく、平成28年度から県内で栽培が開始された。

しかし、産地では、生産者ごとに導入設備や栽培管理が異なるため、「ベリーツ」の魅力である早期収量を確保できず、また、大玉乱形果が発生しやすい特徴があり、それは規格外品として低い単価で販売されていたことから、「さがほのか」からの品種転換が進んでいない。

今後、「ベリーツ」の早期品種転換を図るためには、早期収量を確保できる栽培技術の確立と、大玉乱形果を高単価で販売できる新アイテムの創出が必要となった。

そこで、「ベリーツ」プロジェクトチーム（以下 PT）を設置し、早期収量確保のための ICT 技術等を活用した栽培技術の確立と、単価向上のための新たなアイテムの創出により、各産地で早期収量確保モデル経営体を育成し、「ベリーツ」生産者の満足度向上に取り組んだ。

2. 活動内容（詳細）

（1）プロジェクトチームの設置

課題解決のため、広域普及指導員を PT リーダーとする、普及指導員、県園芸振興課およびブランド推進課、JA 営農指導員、試験研究、JA グループで PT を設置した。

毎月「指導力強化研修会」を開催し、月別の指導ポイントや各産地での生育状況の共有を行った。また、優良生産者の栽培方法や栽培上の工夫等、優良事例については、各産地での指導に活かせるように、具体的に示した資料を提示した。

さらに、ワークショップを行い、県下全域の指導員の連携強化を図ることで、栽培技術の早期県内統一を目指した。



（２）モデル実証ほの設置および重点指導

早期収量確保のために、モデル実証ほを県内 14 カ所に設置し、普及指導員と営農指導員が連携し、重点指導を行うとともに、生育、収量、栽培管理について調査を行った。

得られた調査結果は、広域普及指導員がとりまとめ、PT で比較を行った。これにより、これまで見えてこなかった産地間での栽培管理の違いによる生育差が明らかとなり、具体的な改善指導が可能となった。

また、生育調査の数値と各産地のモデル実証ほの数値をもとに、栽培管理の具体的な改善方法を生産者とともに検討し、決定することで、産地の技術確立を図った。

また、かん水および施肥についても調査を行ったところ、県下の生産者が使用しているかん水チューブが多岐にわたっていたことから、各生産者のかん水肥培管理を改善することで、生育量の確保につながった。

また、PT ではモデル実証ほを活用した指導者向けの現地研修会を開催し、指導力向上を図るとともに、各産地では生産者向けの現地講習会を開催し、「ベリーツ」栽培技術の周知を図った。

（３）環境制御研修会の開催（全 9 回）

本県でも ICT 機器が導入され、ハウス内環境の測定が行われてきたが、活用面では課題があった。

そこで、モデル実証ほ等の 4 圃場を活用し、民間のコンサルティングによる環境制御研修会を開催し、ICT 機器活用による単収向上に取り組んだ。

理想環境の目標値や、観察ポイント、日射量とかん水量、葉面積との関係や、環境データの活用方法等を、PT メンバー、生産者が合同で受講した。また、研修会は、モバイルワークを活用したオンライン配信も併せて行い、多くの生産者が研修内容を研修できる体制を整えた。

この研修を通じて、いちごの生理生態に対応した栽培技術の理解が進み、品種特性に応じて変えるべきポイントや環境に応じた栽培管理の改善点が具体的に整理された。



環境制御研修会

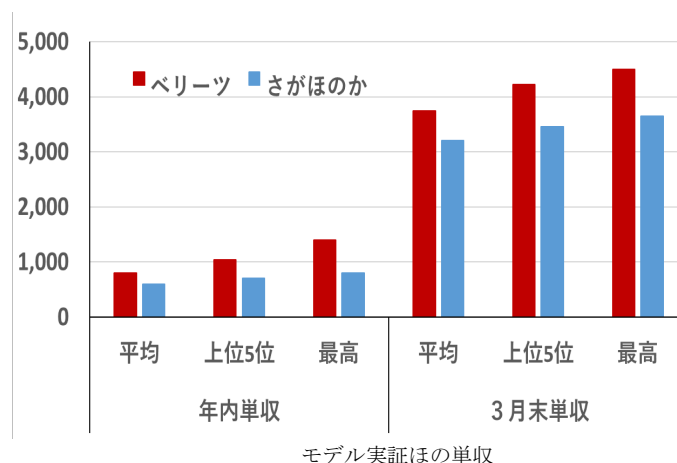
(4) 単価向上のための新たなアイテムの創出

「ベリーツ」で発生しやすい大玉乱形果は、食味は良いものの規格外品として販売されるため、単価が低かった。そこで、PT で、大玉乱形果を有利販売につなげるための協議を行い、特徴を活かした新アイテムとして「ドルチェ」規格を創出し、良食味且つ大玉の高級路線として販売することとした。各産地で、JA と全農が主体となり「ドルチェ」規格の説明会を行い、生産者へ周知を図った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) モデル経営体の早期単収（3 月末）の確保

令和3年産ベリーツモデル実証ほの早期単収(3月末)は、平均で3.7t/10、上位5名で4.2t/10a、最高で4.5t/10aとなり、「さがほのか」に比べて、3月末平均で500kg/10a多収となった。また、平均販売金額(3月末推計)は平均で580万円/10a、最高で700万円/10aとなり、ベリーツの魅力である、高単価時の早期収量確保ができた。



(2) 指導力向上と指導員連携強化

PT による指導力向上研修会では、他産地の優良事例の実践技術を持ち帰り、現地で実践する等、具体的な指導に活用された。

また、生育調査の数値化による比較を通じて、前年度の技術課題や、産技術変更のポイントなどが明確化し、技術確立につながった。

また、生育データの活用方法や生産者と管理の方針決定に役立て、指導力の向上つなげることができた

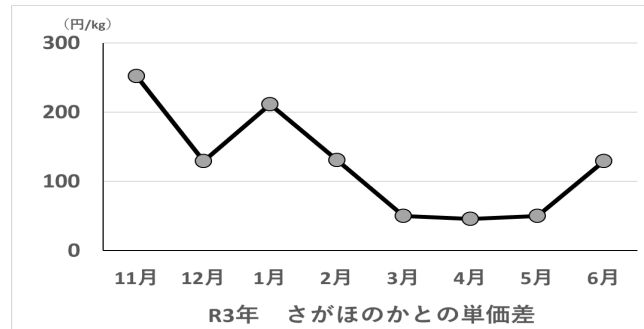
ICT 機器の活用については、単収向上の要因などを学び、環境制御技術の活用について意識向上につながった。

(3) 新たなアイテム創出による単価向上

これまで規格外品として扱われた大玉乱形果が「ドルチェ」規格によって高単価で取引され、生産者の生産意欲が向上した。また、大玉乱形果実は、高収量を確保するためには十分な生育量を確保した栽培方法で発生割合が多くなるため、栽培指導と販売戦略がマッチした取組みとなり、出荷量も増加した。



ベリーツドルチェ



4. 農家等からの評価・コメント（杵築市生産者 K 氏）

ベリーツの課題も解決できてきて、技術もだんだん確立してきた。

単収も安定して確保でき、単価もとれた。ドルチェもよかった。これから、生産者の情報交換などを進めて、単収をもっと向上させていきたい。

5. 普及指導員のコメント（広域普及指導員・池永氏）

ベリーツは、単価の高い早期収量が高く、これまで単価の低かった大玉乱形果も「ドルチェ」規格によって高単価で販売され、「さがほのか」と比較して生産者の販売額が増加した。「ベリーツ」はもっと販売額が増加できる品種なので、その可能性を栽培技術の確立でもっと引き出して、生産者の所得向上につなげたい。

6. 現状・今後の展開等

今後は、生産者主体の技術交流会などをすすめ、早期収量の安定的にむけた花芽分化の安定化や、かん水肥培管理など、炭酸ガス施用技術などを通じて、産地全体の生産量向上につなげていく。